

令和2年漁期の底びき網漁業の漁模様

令和2年漁期（令和2年9月～令和3年6月）の本県沖の底びき網漁業（沖底・小底）の漁模様について報告します。漁獲量の集計は漁獲管理情報処理システムで行い、銚子水揚げ分も含めて集計しました。

1. 漁獲量及び水揚げ金額

令和2年漁期の漁獲量は約3,000トン、水揚げ金額は12.7億円となり、漁獲量、水揚げ金額ともに前年漁期と比べてやや増加しました（図1）。

震災以前の漁獲量は2,000トン前後、水揚げ金額は7～10億円で推移していましたが、震災後は2,500トン以上、12～14億円で推移しており、令和2年漁期もこの傾向は続きました。

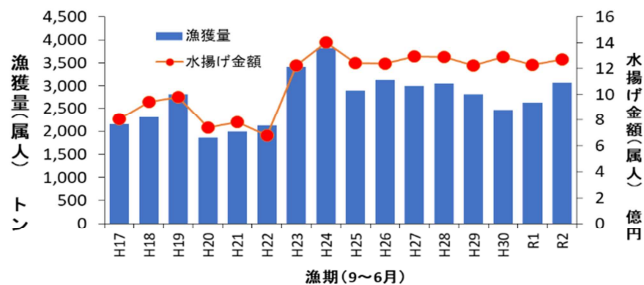


図1 底びき網漁業の漁期別漁獲量と水揚げ金額の推移

2. 漁獲量及び水揚げ金額で主体となった魚種

令和2年漁期に漁獲量が多かった上位5種は、1位ヤリイカ1,305トン（前年漁期786トン、1位）、2位メヒカリ324トン（同311トン、2位）、3位スルメイカ212トン（同105トン、5位）、4位アナゴ129トン（同198トン、3位）、5位ヤナギダコ98トン（同97トン、6位）でした（図2）。前年漁期と比べると、ヤリイカ、メヒカリ、スルメイカ、ヤナギダコは増加しましたが、アナゴや前年漁期4位であったヒラメ（今漁期90トン、前年漁期146トン）は減少しました。

水揚げ金額の上位5種はヤリイカ、メヒカリ、スルメイカ、ヒラメ、アナゴの順となり、前年漁期に比べてヤリイカとスルメイカ以外の3種は減少しました。

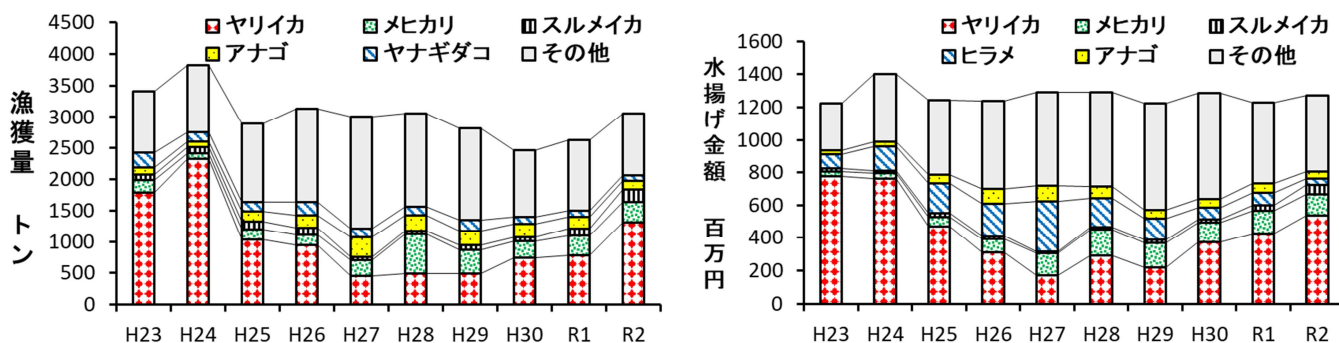


図2 漁獲量及び水揚げ金額で主体となった魚種の推移

3. 三陸から鹿島灘海域におけるヤリイカの漁獲動向

宮城県から千葉県までのヤリイカの漁獲量（全漁法）は、平成26年漁期以降、約1,300～3,500トンの間で変動しています（図3）。宮城海域の漁獲量は、平成28年漁期から増加し、平成30年漁期には約2,100トンに達しましたが、令和2年漁期は約1,500トンに留まりました（図3）。一方、茨城・千葉海域の漁獲量は、令和2年漁期は12月から漁獲量が増加し、毎月350トン前後の漁獲が3月まで継続したことにより、前年漁期のおよそ1.5倍の約1,700トン（前年漁期約1,100トン）となりました（図3、4）。

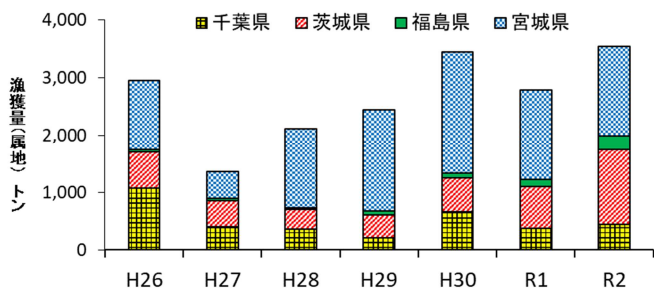


図3 県別ヤリイカ漁獲量の推移

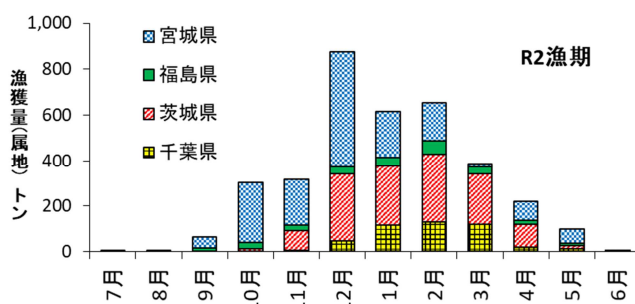


図4 県別・月別ヤリイカ漁獲量の推移

【次回予告】 令和3年8月6日発行の水産の窓は「春シラスの海況経過と秋シラスの予測」を予定しています。